

酒原因の肝疾患警鐘

南風原で研修 酒量と自殺に相関



みんなで健康長寿

アルコール問題をテーマにした県立総合精神保健福祉センター主催の研修会が25日、南風原町で開かれた。県内外の医師が登壇し、アルコールが原因の肝疾患の多さが、沖縄が長寿県でなくなりつつある大きな要因であることや、飲酒と自殺に深い相関があることに警鐘を鳴らした。医師や看護師約90人が参加した。

県健康増進課の系数公課長は、全国では肝疾患による死亡率が年々減少しているが、沖縄では増加していると指摘。最大の要因は酒で、飲酒量を減らす対策を県の「健康長寿復活10ヶ年プラン」重点項目に盛り込むとした。

沖縄協同病院の仲田精神医師は、無職者の肝疾患の死亡率が有職者に比べて圧倒的に多いとし、失業率全国一などの社会環境を含めて、対策を考えるべきだと

訴えた。また、県内は、肥満が原因の肝疾患も多いと注意を促した。

国立病院機構久里浜医療

センター(神奈川県)の樋口進院長は、飲酒量と自殺には深い相関関係があるとし、アルコール依存症者の自殺は、そうでない人より男性は9.3倍、女性は35倍高いとの調査結果を紹介。飲酒量を減らす「節酒」の取り組みが重要だと訴えた。